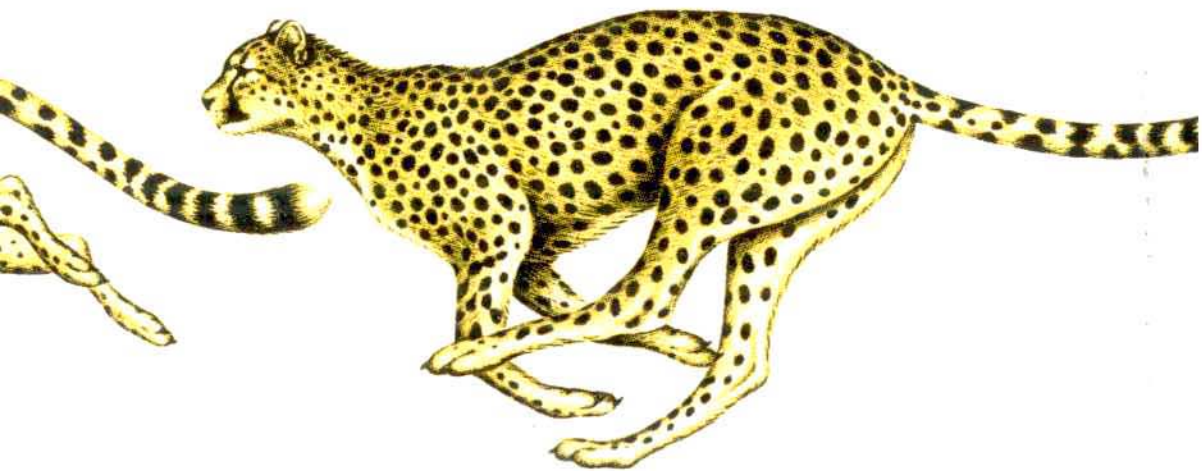


『源氏物語 と楽しむ』

恋のかけひき

山口仲美

多様な恋のかたち・愛のかたちは、どんな会話によってつむぎ出されていくのでしょうか？
それは、現代にも通じる男と女の愛と会話のダイナミクスを教えてください。

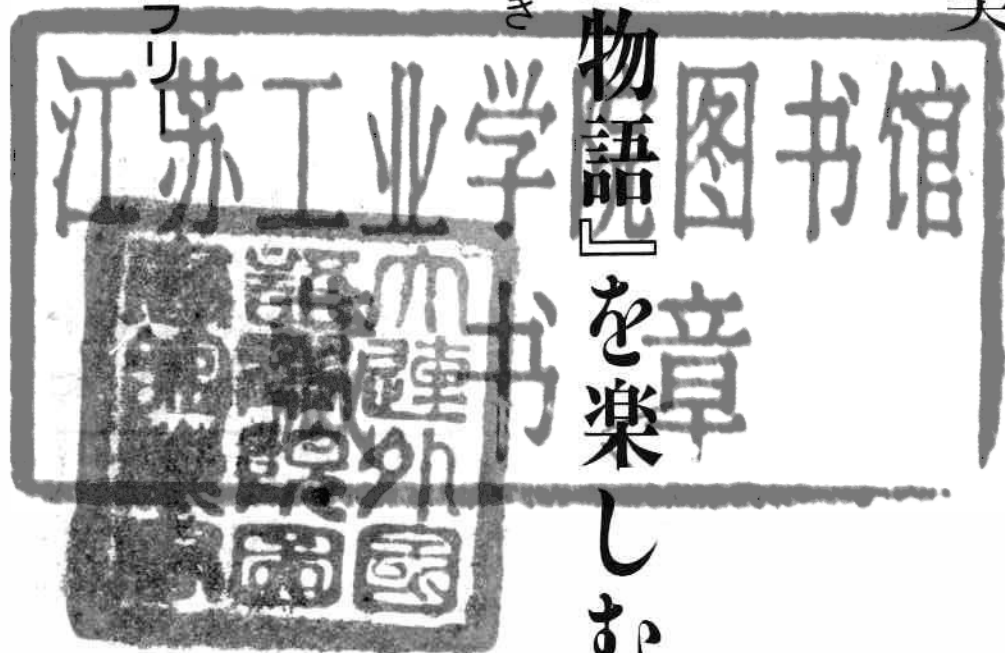


山口仲美

『源氏物語』を樂しむ

恋のかけひき

丸善ライブラリ



『源氏物語』を楽しむ
恋のかけひき

丸善ライブラリー 237

平成9年7月20日 発行

著作者 山 口 仲 美

発行者 鈴 木 信 夫

出版事業部 深山恒雄

発行所 丸 善 株 式 会 社

出版事業部 〒103 東京都中央区日本橋三丁目9番2号

編集部 電話 (03) 3272-0513 / FAX (03) 3274-0581

営業部 電話 (03) 3272-0521 / FAX (03) 3274-0551

郵便振替口座 00170-5-5

© Nakami Yamaguchi, 1997

組版印刷・暁印刷株式会社／製本・株式会社 星共社

ISBN 4-621-05237-3 C0291

Printed in Japan

『源氏物語』を楽しむ——目次

プロローグ		I
人妻との恋——光源氏と空蟬		15
はかなき恋——光源氏と夕顔		31
秘められた恋——光源氏と藤壺		53
老女房の誘惑——光源氏と源典侍		73
妻と愛人——光源氏と葵の上と六条御息所と		95

幸福な結婚——光源氏と紫の上（二）	117
中年の恋——光源氏と玉鬘	137
破綻した結婚——光源氏と紫の上（二）	163
不幸な結婚——光源氏と女三の宮	185
エピローグ	201

プロローグ

男と女の会話

「恋のかけひき」などといって、いったい何を意図しているのかとお思いでしょうね。

私のもくろみは、『源氏物語』の主人公光源氏ひかるげんじが、恋や結婚の場で、女たちとどんな駆け引きのある会話を交わしているかを明らかにしたいということなのです。

『源氏物語』には、実にさまざまな恋愛や結婚生活が描かれていて、そこで交わされる男と女の会話は、緊張した人間関係をつくりあげており、現代にも通じる普遍性を持っています。

「男と女の会話」に注目して、『源氏物語』を読む。すると、きわめて現代的な『源氏物語』

の魅力がひきだせるのではないかというのが、そもそもの私のねらいなのです。多様な恋の私たち、愛のかたちが、「会話」によってつむぎ出されていくところを、ぜひともこの本で明らかにしたいと思っていますのです。

源氏物語、その展開

『源氏物語』は、登場人物が複雑でわからないとおっしゃる方に、この本は、そうしたものを知らなくても十分楽しめると断言いたしましょう。

なにしろ、この本の各章に登場するのは光源氏と相手になった女性だけなのですから。せいぜい多くても三角関係にある二人の女性と光源氏といった三人どまりです。

とはいうものの、この本をよりいっそう楽しんでいたくためには、『源氏物語』の内容、登場人物、それから現代と違う結婚形態などについて、簡単にふれておく必要があります。う。

『源氏物語』の作者は、いうまでもなく、紫式部とよばれた女性。平安時代も中頃に書かれた長編小説です。世界最古の長編小説であり、日本人が誇り得る傑作中の傑作でもあります。

五十四卷から成っていますが、一卷が短いものですから、読み切れないなんてことはありません。内容は、一言でいえば、ラブ・ストーリー。むろん単なる恋愛物語ではなく、人生への深い洞察が込められています。

内容上、大きく三つの部分に分けられます。第一部は、卷一の「桐壺」^{きりつぼ}から卷三十三の「藤裏葉」^{うらば}まで。主人公は、「光源氏」。あらゆる美質を備えた「光源氏」が、紆余曲折を経ながらも、栄耀栄華を極めていく話。ここには、彼の絢爛^{けんらん}たる恋愛模様が、現出しています。

第二部は、卷三十四の「若菜」^{わかな}から卷四十一の「幻」^{まぼろし}まで。主人公は、第一部と同じく「光源氏」ですが、第一部と打って変わって彼の中年以後の苦悩に満ちた人生が語られていきます。ここでは、光源氏は、恋と結婚の敗北者。女との言葉のやりとりにも人生の苦汁がにじみでています。

また、この第二部には、光源氏の息子「夕霧」が登場し、父とは全く異なる生き方を見せてくれます。恋愛や結婚も父とは対照的な色合いを示しています。

第三部は、卷四十二の「匂宮」^{におうのみや}から、最終の卷五十四の「夢浮橋」^{ゆめのうきはし}まで。いわゆる「宇治十帖」と呼ばれる部分で、『源氏物語』の正編（第一部・第二部）から切り離すことのできる

部分です。光源氏亡き後の物語で、登場人物も舞台となる場所も、第一部・第二部とは違いますが。

この本では、紙数の関係で、第三部の恋については、残念ながら省略です。第一部と第二部の「光源氏」に焦点をしぼり、彼を軸にして繰り広げられる恋愛や結婚の様相を、会話を通してえぐり出していくことにします。

登場人物の名前は？

ところで、『源氏物語』に登場する「光源氏」「夕霧」といった名前は、一体何なのか？ という疑問をお持ちの方もいらっしゃると思いますので、ちよつと説明しておくことにします。

一言で言ってしまうえば、『源氏物語』の登場人物の名は、読者たちが、同一人物であることを把握しやすくするために付けた通称なのです。

『源氏物語』は、「太政大臣」「左大臣」「右大将」「中将」などの官職名や、「中宮」「女御」^{にようご}「典侍」^{ないし}などの後宮における地位・官職名、もしくは、後宮の殿舎名と合体した「弘徽殿」^{こうきでん}の女

御」「藤壺ふじつばの中宮」などの呼び名で、物語が展開していきます。けれども、これらの呼び名は、物語の中の時間の進行とともに変化していきます。そのため、読者は、前に出てきた「中將」と、後に出てきた「大臣」とが、同一人物かどうか判断しかねる場合が多くなる。そこで、同一人であることを理解しやすくするために、『源氏物語』の内容にヒントを得つつ、読者たちが、一定の呼び名を与えた。それが、固定化していき、現在われわれの知る登場人物の名前となっているのです。

たとえば、第一部と第二部の主人公の「光源氏」。彼の名にみえる「光」は、光輝く容姿と才能を持っているところから付けられたあだ名の一種。むろん、本名では、ありません。その下の「源氏」は、臣籍降下して「源氏」の姓を賜ったので、付されています。

彼のことを、ただ「源氏」と呼ぶこともありますが、「源氏」は姓ですから、同族の人物たちと区別する意味で、「光」の名を冠しておいた方がわかりやすいと思われれます。この本では、彼のことを「光源氏」と呼ぶことにします。

息子の「夕霧」の名は、彼が詠んだ歌の中の言葉から付けられたものです。彼は、女のもとに留まりたくて、折から立ちこめる夕方の霧にかこつけて訴えた。

「山里のあはれを添ふる夕霧に立ち出でむそらもなきこちして」

（山里のもの寂しさを募らせる夕霧に、ここから帰っていく気にもなれません）

彼らしい恋歌にヒントを得て、彼のことを「夕霧」と呼び慣わしているのです。『源氏物語』に「夕霧」の名で登場しているわけではありません。

光源氏の恋や結婚相手となった女性の名としては、「空蟬」うつせみ「夕顔」ゆうがお「葵」あおい「紫」むらさき「玉鬘」たまかづらという名前が出てきます。これらの名前も、彼女たちの詠んだ歌、あるいは相手の男性の詠んで寄こした歌の中の言葉にちなんで付けられたあだ名の一種。

「葵」や「紫」には、さらに妻であることを表す「上」の語を付して「葵の上」「紫の上」と呼びならわしています。

このほか、この本には、「藤壺」げんのないしのすけ「源典侍」ろくじようみやすどころ「六条御息所」おんなさん「女三の宮」みやと呼ばれる女性たちが、登場します。

「藤壺」は、後宮の殿舎の名前から、「源典侍」は、みなもと源の姓をもつ典侍（女官名）であるところから、「六条御息所」は、六条に住む御息所（皇太子や親王の妃）きさきであるところから、そして「女三の宮」は、三番目の皇女であるところからつけられた通称です。

以上が、この本で取り上げる登場人物たち。全部あわせても、男性一人に、女性九人。複雑な系図など知らなくても十分に理解できる内容です。ま、そうは言っても、一層深い理解を得ていただくための便宜として、各章の扉の裏に簡略な系図を掲げておくことにしました。

当時の結婚

それにしても、「光源氏」という一人の男性を中心に、なぜ、あれほど多彩な恋愛や結婚の形を描き出すことが出来たのでしょうか？

それは、現代とは異なる結婚形態に一因があります。上流貴族社会では、男性は、「正妻」の他に、複数の「妾妻」を持つことが許されていました。当時の結婚形態については、よく「一夫多妻制」といわれています。ところが、最近の研究成果（工藤重矩『平安期の結婚制度と文学』風間書房 一九九四年二月刊）によつて、それが、誤解を生みやすい言葉であることが分かってきました。一人の男性が、同時に多数の妻を持つことが出来るわけではないからです。

当時においても、一人の男性が法律上結婚できるのは、一人の女性に限られています。家同士の話し合いがなされ、親族に認められた結婚を行ない、法律的にも社会的にも認められてい

る妻は、ただ一人なのです。「嫡妻（正妻）」と呼びます。

ただ、現代と違って、当時の男性は、「正妻」の他に、複数の「妾妻」を持つことが、社会的に許容されていたのです。「妾妻」は、法律的には、認められていませんから、男性の愛情が薄れば、割合簡単に関係が解消されてしまう不安定な存在です。

また、複数の「妾妻」たちの間には、出自や、男性の愛情の度合いによって、序列が出来ます。男性からの経済的な援助も、それぞれ分に応じて受けることが出来たようです。

「正妻」の他に、複数の「妾妻」を持つことが、社会的に承認されていることが、多様な恋物語の温床となったのです。

さらに、現在とは違った点として、「召人」^{めしうど}の存在があげられます。男性の身分が、極めて高く、女性の身分が低い場合には、いくら愛し合っても、その女性は「妾妻」にも数えられず、単なる「召人」として男性の邸宅に引き取られ住み込む以外にはないといった場合があります。

このほか、「妾妻」「召人」にもならず、世間に公表されることのない密やかな「愛人」関係を続ける女性たちもいます。

『源氏物語』に登場する女性たちは、「正妻」か「妾妻」か「召人」か「愛人」かといった格付けを持っています。たとえば、この本に登場する「葵の上」は、光源氏の「正妻」です。彼女の敵視した女性「六条御息所」は、光源氏の「愛人」格にとどまりました。光源氏が、彼女との関係を秘して、世に公表しませんでしたから。

正妻「葵の上」は、長男の「夕霧」を出産した直後に亡くなってしまいました。彼女の亡き後、光源氏は、晩年に至るまで「正妻」をもうけません。「葵の上」という最愛の「妾妻」がいたからです。

「葵の上」は、正妻と同じように大事にされ、最高の待遇を受けていますが、法律上は「正妻」ではなく、「妾妻」の一人にすぎません。だからこそ、光源氏の愛を失わないために努力し賢明に生きる、理想的な女性であり続けたのです。

光源氏は、晩年になって皇女「女三の宮」を「正妻」として迎え、ために苦悩の種を背負い込み、人生が暗転して行きます。

光源氏の愛の遍歴

けれども、光源氏の半生は、昇り行く太陽のごとく、力と光に満ちあふれ、恋においても恐い物知らず。人妻「空蟬」に言い寄ったり、友人の元愛人「夕顔」と恋の逃避行を行なった、美しく若い継母「藤壺」に命がけの恋をしたり。

美男で、身分が高く、諸芸に秀で、経済力・政治力ともに拔群といった光源氏。これだけで、十分女性の憧れの的になるのに、さらに女心をつかむのが、この上なくうまい。彼の発する言葉は、女の心にぴたっと添って、女を魅惑してしまします。

光源氏の相手になった女性たちは、人柄や環境に応じて、個性豊かな言葉を発し、光源氏とさまざまな関係をつくっていきます。

たとえば、彼の甘い言葉に素直に魅せられ、それにこたえ、深い恋愛関係に陥っていく「夕顔」のような女性もいれば、自分の低い身分を考えて、彼に強く惹かれつつも、彼の甘いささやきに乗らずに、理性的に身を処していく「空蟬」のような女性もいます。

あるいは、彼の言葉に、刺のある言葉でしか対応できず、良い関係がつかれない「葵の上」や「六条御息所」のような女性もいます。

彼らの交わす言葉をたどっていくと、男と女の愛と会話のダイナミクスが見えてきます。

男を手引きする

最後に、現代と大きく違っている風俗・習慣についての若干の補足説明をします。

すでに述べましたように、結婚形態は、一夫一妻多妾型とでもいうべきもの。「正妻」にあたる女性とは、結婚当初の「通い婚」の期間を過ぎると、男性が自宅に引き取って同居するのが普通です。「妾妻」や「愛人」の所には、ずうっと「通い婚」であるのが一般的です。夜になると男性が、女性の家へ通っていき、夜が明けないうちに女性の家から帰って行くという形態です。ですから、男性が通って来なくなったら、離別したことになります。

また、結婚年齢も現在とは違います。女性は、十二歳から二十歳までの間に結婚をするのが普通のケース。二十歳を過ぎると、やや晩婚の感があります。

年齢が相対的に低いので、現在にひきくらべるためには、男女ともに、十歳くらい加算して考えると、ちょうどよくなります。

また、現在と大きく違っている点として、宮廷や貴族の邸宅に仕える「女房」の存在があげ